The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	方向・移動の形式をめぐって
Author(s)	森山, 卓郎
Citation	語文. 1987, 49, p. 29-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68769
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

方向・移動の形式をめぐって

森山卓郎

一　はじめに

動詞述語の基本的な意味が動きの叙述にあるとすれば、その動きの空間的側面をとらえることも必要である。日本語動詞述語では、動きの表現に関しての方向性・移動性（さらに広義の場所性）を表す形式として、テクル・テイクやそれに関連した若干の形式が分化していて、一つの文法的カテゴリーをなしている。ここでは形態論的・統語論的・語用論的観点から、これら方向・移動のカテゴリーについて考える。

二　これまでの研究と問題点

テクル・テイクの形式自体については、「遊んでくる（継起的）」「走ってくる（同時的）」のように、比較的目立つ現象があるので、これまでに多くの研究者から取り上げられてきた（吉川1968、1971、森田1968、1977、野沢1975、成田1980、近藤1985など）。しかし、張1986を除いて、いずれも、移動同時的動作か継起的動作かという分類や、語彙的にどのような動きが移動的になるか、といった意味的な観点を問題にするものである。また、大江1975は、クル・イクの方向性の問題を come, go との比較において扱うものである。

しかし、そうした意味的な問題のほかに、アスペクト的な形式との関係はどうか、名詞の素性の問題やクル・イクの方向の違いは何を意味するのか、継起的動作の表現的な意味は何か、などの問題が残っている。具体的問題は、各個に触れていく。

三　形式の同定――場所・方向とアスペクト――

方向・移動を表すテクル・テイクは、前項動詞と一語として発音され、テ形のパラダイムの一部を占める。「迫ってくる↑→迫りくる」のように、複合動詞とも近いが、「～して～する」のように、動詞が並列的に並ぶ（テ形の接続形式）という形態的な点や生産性の点で大きく違っている。一方、「～シテ、～スル」という並列的な接続形式にも似ているが、音韻的・形態的に一語化している点が、やはり違っている。例えば「遊んでいく」は、「遊んで、行く」という意味でも、

あそんでいく（○●●●●●）asondeiku→asondeku

のうに、アクセント核は一つになっているし、一語的な発音にもなる（発音はもちろん傍証にすぎないが）。

テクル・テイクの諸用法の分類・整理については、シテマワルなども含めて、後に詳しく検討するが、まず、ここでは、大きなレベルから見て、方向・移動のテクル・テイク等が生産的な形式として、すなわち、文法的な問題として考えられるべきことを確認しておく。

方向・移動の形式とアスペクトの形式との関連をまず見てみる。

自然現象など非意志的動きの起動（「突然頭痛がしてきた」「定数を変えると答えが違ってくる」など——後者は元々状態的な述語を変化動詞化する例——）を表すテクルは、テイクというペアを持たないので、視点の変化によって、テイクが使えるかどうかで、基本的なテストができる。例えば「臭ってくる」などは、視点を逆にして「臭っていく」などと言えれば、一応、そこでは方向・移動的な意味で使われていると言えよう。もちろん、

「（略）」という言葉が、臓腑のそこから苦い味をもってこみあげてきた。（白い人・黄色い人）

のように、方向・移動に関わる格成分が共起していれば、意味的な観点からアスペクト形式でないことがわかる。

一方、方向・移動のテクル・テイクと進展的なアスペクトとの区別では、双方にテイクも出現するので、区別は難しい。例えば、

（略）その一部が第一線近くに位置する歩兵団司令部に接近してきた。（最後の帝国軍人）

のテクルは「接近する」という進展的な変化の時間的なアスペクトを表すものか、あるいは、「近付いて、やってくる」という具体的移動を表すものか、判断がつきにくい。このような位置変化の場合、位置変化の時間的側面は移動ということと中和していると言える。

以上は方向・移動の形式とアスペクトの形式とが、多義的でもありうる例であるが、以前からの、或は以後への、継続を表すテキタ（テクルの形はない）・テイクは、形態的に全く明白に分けられる。すなわち、継続の時の成分が共起すれば、各々、必ず、継続の意味で解釈され、

こんな靴で、6年間も向こうの町まで新聞配達をしてきたのか。
こんな靴で、6年間も向こうの町まで新聞配達をしていくのか。
向こうの町まで新聞配達をしてきた／していく

のように、テクル（テキタ）・テイクは、アスペクト的な以前からの継続の意味になる。このように、同一の形式が多様な意味を担う場合、「～してきてきた」のように共起することはないので、意味の決定に優先順位ができることになる。継続の意味は、動きを繰り返し的に問題にするものなので、副詞のスコープ（掛かり先の範囲）が大きく、優先的解釈を受ける。[1]

以上のように、テクル・テイクは多義的なものであり、特に、時間・空間の連続的変化という点でアスペクトを表す形式と一種連続的とも言える密接な関係を持っている。しかし、テイクが使えるか、方向・移動に関する格成分が共起していないか、時間の成分が共起しているか、などのテストによって、アスペクトとは別なものとして、方向・移動のテクル・テイクなどの形式が同定される。

四　分類とその形態的・意味的根拠づけ

次に、方向・移動の形式の分類を主に形態論的な観点から考える。結論は次の通りである。

(2)

類	意味	交替	GAP	島	ボ	介	歩く	場NP	格
語彙的形式	語彙的固定	*	*	*	*	*	1	後
語彙的(方向的)	方向固定	*	*	*	*	*		前
働き掛け方向	方向づけ	0	0	0	*	*		前
動詞連合前head	継起移動	0	0	0	0	*		前
動詞連合後head	同時移動	0	0	0	0	0		前
				0	0	0	1	後

まず、**語彙的形式**として、

ガローニが偵察にやって来る。（シナリオ The Protector）

の「やってくる」などが挙げられよう。この場合、前項動詞の「やる」という意味が特定できない以上、語彙的な結合であり、共通部分の省略や前項動詞だけを「そう」などで照応させることはできない（いわゆる anaphoric island）。全体で一語の動詞である。

さらに、これに連続して、動きの方向性が認められる場合もある。

生田大隊は、生田大隊でまとまり、旭川部隊の伝統と栄光の下に団結して戦い死んでいこう、（静かなノモンハン）

生まれてきた赤ちゃん

のように、働き掛けを表すわけではないが、**方向性**を持って認識されるような、生成・消滅の動きに共起するテクル・テイクである。これは、evaluative viewpoint によるもので、基本的・正常な在り方を中心としてクル・イクの deixis の方向設定をしているものである（Clark1974）。語彙的形式であり、共通部分の省略はできず、

彼は死に∅、彼は消えていった。

などと言えず、anaphoric island にもならない。

次に取り上げるのは、動きの抽象的な方向づけを表すものである。

振り付け師、こりずに、殴りかかっていく。（同右）

のように、対象に対して影響を与える動き（動き掛け）の方向を表す。働き掛けを表す動詞とは、具体的な移動を表さないものである。

言う、怒る、抗議する、攻撃する、責める、頼る、連絡する

紹介する、拒否する、通知する、追及する、求める、はむかう

これらについたテクル・テイクは、**働き掛け方向の形式**と呼ぶことにする。具体的な移動を表すわけではないという点で、形式化した一種の派生形態と言えるが、共起する動詞には制限がある。ここで働き掛けを表すとした動詞の共通の統語論的特徴に、

～に対して、／言う／連絡する／攻撃する／飛び掛かる……

のような、ニ対シテという複合格助詞の共起があり、

私は事件を彼から連絡された。

のように、受け身の動作主がカラで取り上げられるという現象がある。動作主が源泉的に取り上げられるということは、その動きが、対象に対する方向づけを持つ（持ちうる）ということである。

形態としては、

彼は抗議し∅、彼女は攻撃してきた。

＊彼女は抗議して∅、彼も攻撃してきた。

のように、共通部分の省略が裸の連用形に限って可能であり、

彼は先方へ抗議していった。彼女もそうしていった。

のような、「そう（＝抗議する）」による部分要素の照応も可能である。これらは、形態的には独立的な関係にあることを示すのであるが、その逆の現象もある。すなわち、まともの受け身においては、

私は、敵に攻撃されてきた（継起的な意味に解釈される。）

私は、敵に攻撃してこられた（働き掛けの方向の意味）

のように、受け身形式がテクル・テイクよりも先行することができ

ない。この点で結合度が強く、動詞の表す働き掛けの方向を決める形態と言うべきだろう。（一方、ラレテクル／イクのような形がある継起的意味のものは、以下でいう動詞連合として分類される。）

このタイプの形式では、

＊攻撃して回られる（動詞連合タイプの「攻撃して回る」が迷惑受け身になったという形なら可能）

のように、テクルをほかの動詞で置き換えることはできない。

一方、これらに対して、「～して、来る／行く」のように、意味的にも機能的にも、前項動詞とテクル・テイクとがかなり緩やかに結合しているというタイプがある。結合の仕方には、前項動詞が意味的中心（ヘッドという）[3]になるもの（前ヘッド…クル・イクの格は保存されない）と、テクル・テイクが意味的中心になるもの（後ヘッド…ただし、「学校へ制服を着てくる」のように前項動詞の格成分も保存する）とがある。いずれもクル・イクの実質的な意味が残り、音韻的には一語化していても、前項動詞に半独立的にテクル・テイクが結合している。これらを、**動詞連合**と呼ぶ。

ヘッドが何か、というとらえ方をした理由は、従来の「同時」か「継起」かの規定が、アスペクト的な条件に依存していることによる。例えば、多義である「着てきた」において、「着て」という動作を「同時」とみる（「着たまま来る」）にしても、「着る」動作は完了したとみる（「着た」後で来る）にしても、どちらも「着た後」と言えるように、「着る」動きは終わっているとも見られ、厳密にどこまでを「着る」動作ととるかという、解釈の違いの問題になる。むしろ、「～で服を着てきた／～へ服を着てきた」のように、格をはじめ、統語論的な意味の中心がどちらにあるかという見方をすべきであろう。

なお、この考え方は「同時」「継起」をも説明する。すなわち、「同時的移動」の後ヘッドは、クル・イクという移動の意味がヘッドとして残されているものであり、その場合の前項動詞の意味は一種の修飾表現として、必然的に移動時のマナー的な動作（同時動作）ということになるからである。一方、「継続的動作」の前ヘッドでは意味の中心は前項動詞であり、テクル・テイクは前項動詞と並列的に並べられ、そこから、動作をすることと、移動することとが、継起的関係で結ばれるに過ぎない。こうして、

成田で飛行機に乗ってきた。

成田へ飛行機に乗ってきた。

という意味の違いができるのである。

また、後ヘッドの認定においては、

ペルシアの品物が渡ってきた。

の「～カラ～ニ渡る」「～カラ～ニ来る」ように、共通の格パタンを取るものも含める。クル・イクの意味が保存されているからである。意味的にも「渡って、来る」というように、前項が修飾的（後項のマナーを限定する）であるし、意味的にも同時的動作である。

さて、形態論的には、どちらがヘッドでも、テを含んだまま、

留学先では、彼は遊んでØ、彼女は勉強してきた。…前ヘッド

彼は走ってØ、彼女は歩いてきた。…後ヘッド

のように、共通部分を省略すること（もちろん、連用形のまま「彼は遊び、彼女は勉強してきた」のように言うこともできる）や、

彼は遊んでいった。彼女もそうしていった。…前ヘッド

彼は走っていった。彼女もそうしていった。…後ヘッド

のように、「そう」による部分的な照応も可能である。これらの現象は、形態的な独立性の強さを表すものである。

さらに、ボイス形態の介在に関しては、前ヘッドのものは、

彼は職員室で殴られていった。

のように、まともの受け身の形式など、文法的な形式がテクルなどの間に自由に介在できる一方、以降にはまともの受け身の形態がくることができない。

ただし、後ヘッドのものは、前項動詞の語彙的意味によって、ボイス形式の介在の仕方が違っている。

多くの薬品が持ってこられた／＊持たれてきた。

多くの薬品が担いでこられた／＊担がれてきた

のように、前項動詞が非移動動詞であり、移動物（対象）がモノ扱ならば、ボイス形式が介在しなかったり（もともと「持たれる」とは言えない）[4]、介在すれば、特に移動物に焦点があったような感情移入 empathy のこもった意味になるようである。

これに対し、移動物が人扱いならば、「～されて行く」が言える。

赤い靴履いていた女の子、異人さんに連れられていっちゃった

赤い靴履いていた女の子、異人さんに連れていかれちゃった

のように、ボイス形式が介在すると、「連れられる」が「行く」を修飾するような意味関係になり、「行く」こと自体に独立性ないし主体性がよみこまれるようである。前述の感情移入による現象である。一方、「連れていかれる」となれば、「連れて」と「行く」の結合が大きく、「行く」ことに主体性がよみこまれなくなる。（この意味的対立は、後述する移動の意志性の問題にも関わる。）

ところが、前項動詞が移動動詞ならば、

松丸太が運ばれてきましたので（静かなノモンハン）

＊松丸太が運んでこられましたので

のように、移動動詞が並列することになり、互いに独立的な関係で、ボイス形式を介在させて連合するようになる。

以上のように、意味によって、ボイス形式がテクル・テイクより後につく現象もあるが、大きくまとめれば、この動詞連合後ヘッド型においても、前項動詞とテクル・テイクの間にボイスの形式が介在することができる。特に、移動物に焦点をあてればボイス形式を介在させるようである。

また、テクル・テイクの替わりとして、テマワル、テアルクのような別の移動動詞も、

コートを着て回る（あちこちで着る…継起／着たまま…同時）

のように、両方の意味で共起することができる。形態論的特徴は同じである。

さらに、共起する名詞の意味としては、一般に、

彼のところに/??彼に　連れてきた

のように、特に、テクル・テイクがヘッドとなる後ヘッドの場合に、場所名詞が必要だということがある。

後ヘッドの移動同時的意味に対応する動詞句の語彙的意味としては、移動同時的な「帰る」等の移動動詞、「歩く」等の移動形態の動詞、さらに、「履く・担ぐ」等の移動時の主語態勢を表す動詞等があるが、すべて移動と同時的な様子を示すという規定だけで十分であろう[5]。

以上、主として形態論的な観点から、テクル・テイクが四つ（五つ）に分類できることを示した。これらは、意味的な対応も持つも

のである。

五　移動物の問題

以上述べた所では、原則としてクル・イクの方向性は、どちらも同様に考えられるようであるが、実は、動詞連合後ヘッドのタイプでの、他動詞についてテクル・テイクでは、クルとイクの用法が違う（張1986に指摘がある）。

＊贈り物を送っていく。

贈り物を送ってくる。

のように、「イク」動作だけ、対象だけの移動が出来ない。これは、deictic な視点と主語の関係によって説明できる。すなわち、クルは、終点がわの視点であり、「もともとゴールに無かった移動物＝もともとゴールにいない主語」という関係が成立し、対象だけの移動でも、移動物は主語（送り手）と同じ側にあると言える。

一方、イクは、出発点がわの視点であり、「起点から離れる移動物＝対象だけ」という意味関係になる。すなわち、対象だけが移動し、主語は起点に留どまるというように、対象たる移動物は主語と「別行動」となる。

つまり、対象移動のテクルは、

[deixis 基準] ←——対象——主語（送り手）

という関係から、対象だけが別にされるのでなく、主語も別なところから、対象は、**主語の一種の拡張**として次のようにも解釈される。

[deixis 基準] ←——〈対象——主語（送り手）〉

この場合、主語が deixis 基準に向かって影響を与えるという働き掛けの形式の意味・用法に連続している。一方、対象移動のテイクは、

[deixis 基準＝主語（送り手）] ——対象——→

のように、対象だけが別行動で、deixis 基準からは対象を主語の拡張として取り上げることができない。

このような関係は、ボイスの転換によっても明らかである。

贈り物が送られてきた。

＊先生が子供を歩かせていった。（子供だけの移動なら不自然。主語「先生」も同時に移動するなら可能）

のように、受け身の形式による移動物が主語化や、使役の形式による移動者の対象化により、対象の主語への取り込み具合が変わるからである。

六　動詞連合類と複合動詞・並列形態との関係

動詞連合においては、上述の例外はあれ、原則的には、前項動詞と後項のテクル・テイクなどとは同一の主語と言える。この構造は、「〜シテ、〜スル」というテ形の接続に構造的に連続している。例えば、

遊んで、行く→［主語 i］が遊んで、［主語 i］が行く。

＝［主語 i］が〈遊んで、行く〉

のように再分析できる。このように、動詞連合をテ形の接続形式に関連させるならば、「テマワル、テアルク」のような形式の出現も「謝って回る＝謝って、回る」のように、同一のレベルで問題にできるであろう。

すでに触れた通り、後ヘッドは、

歩いて、来る。

のように、前項要素に当たるテ形動詞がクル・イクを一種の様態修

飾として修飾することになる。これが、移動同時的な意味であり、統語論的には、場所名詞性の保持になる。

一方、前ヘッドは、前項の要素が全体を支配するのであり、クル・イク自体は、独立的に並列的につくのみである。そこで、

彼は、ご飯を食べて、行った。

のように、相互に独立に並列な関係になり、それが、継起的意味をもたらすことになる。

では、後項動詞の意味が生きている動詞連合類は、単に「〜シテ、〜スル」という形が一体化したものにすぎないのであろうか。単にそうとは言えない。まず、後項動詞の制限である。テ形の結合で音韻的に一語化することができるのは、

てくる、ていく、て回る、て歩く、て帰る

などで、ほかには、「飛んで遊ぶ、泳いで渡る」など、用法によって、一部に音韻的一語化をする形式もあるという程度である。同じ移動動詞でも、漢語動詞は動詞連合後項にくることはないし、

移る、走る、はう、泳ぐ、近付く、遠ざかる、

なども動詞連合後項にはならない。「歩く」「歩む」は似ているが、

謝って歩く／＊謝って歩む

のように、「歩む」は連合することがない。

さらに、連合は一回的で、「遊び回る」「回っていく」に対し、

遊ぶ＋回って＋行く＝＊遊んで回っていく

とならない。この限りでは統語論的加算関係は成立しないのである。ヘッドの違いはあれ、こうした並列的関係は、

歩き始める＝〔歩くこと〕を始める

のような統語論的な複合動詞などの統語論的関係と違い、むしろ、

泣き喚く（並列的…それぞれがヘッド…「泣き、また、喚く」）

殴り倒す（修飾的…後項がヘッド…「殴って、倒す」）

のように、語彙的複合動詞とも連続している。しかし、最初に述べたように、動詞連合と語彙的な複合動詞とは、テ形の有無という形態的特徴のほかに、前項動詞が生産的なこと、後項動詞が限定されていること、などの違いがある。

まとめると、動詞連合は、第一に、形態的には、テ形の動詞に後項動詞（クル・イクなどに限定されている）がついた独立的な形をしている一方、音韻的には一語化していること、第二に、語彙的統合性の制約を持たないほど、独立的であるということ、すなわち、形式の介在を許すうえ、部分形態だけに対する省略や代名詞による取り立て等が可能なこと、第三に、語彙的な複合動詞と違い、極めて生産的なこと、第四に、前項動詞と後項要素の関係は、並列的なこと（ここから、原則として主語を共通にするということも、並列的表現との連続性も同様に説明できる）、第五に、連合が一回しかおこらないこと、いう、極めて特異な特徴付けができるであろう。これは、複合動詞と動詞の（派生的）形態（いわゆる助動詞）との中間に位置するものである。

特に、動詞の並列的な接続形式という文法的に構成された関係から、動詞連合、さらに、方向性の形態、そしてアスペクトのテクル・テイクのような純粋に形態と言えるものへ、というように、後項動詞が実質的意味を希薄にして、形式化していく**連続性**が、注目されるのである。同様の連続性は、「してみせる」のような別のテ形の形態にもみることが出来よう。

七　語用論的要請

最後に、このような方向・移動の形式が使用される契機について考えてみたい。特に、形態論的に動詞連合のような特異な形があるには、それなりの理由を考えなければならないであろう。

まず、動詞連合後ヘッド類は、基本的に、移動の表現を表すのであり、

歩いてきた↓＊歩いた

のように、テクル・テイクの形式の意味は明確である。すなわち、移動形態の動詞はそれ自体では移動を表さないが、テクル・テイクがつくことで、動きが初めて**移動的**な意味になるのである。例えば、

敵機が六機、機首を下げて地へ突っ込んでくるような恰好で飛んできました。（静かなノモンハン）

では、テクルなしに「飛びました」とすると、意味が違ってしまうであろう。また、移動自体も、クル・イクの deixis によって「向こうからこちらへ」という格成分を補うに等しい意味が付与される。

一方、前ヘッドの動詞連合類においては、純粋に継起的な動きを表すとは言いにくい場合もあり、問題である。例えば、

お国の為に、死んでこい。

のような文は、継起的意味に限定して解釈すれば、極めてナンセンスにならざるをえない。「死んで」から「来る」というわけにはいかないからである。実際、この場合、テクル・テイクがなくても、実質的な意味にほとんど違いがないとも言える。この場合、テクル・テイクが、厳密な動きと移動との継起的生起を表すものでなくなっているということになるが、では、どのような（表現的）意味を担っているのであろうか。

まず、第一に挙げられるのが、移動を含意することによる、動作の**生起場所の設定**である。当然、この基本的条件として、主語が同一の referent であるということが必要である。例えば、

今の受け持ちの係員と交替してくる。

という場合、「別の係員が交替してやってくる」という意味なら、テクルはそぐわないであろう。「同一の係員が一時的に交替し、また、戻る」という意味でなければ文法的に安定しない。このような特徴を同一性 identity 保証の条件と呼ぶ。テクルが、戻ってくるというニュアンスを持つのは、基本的にこの同一性保証の条件による。前述の「死んでこい」場合も、基本的な同一性は保証されていると見なければならないであろう。

さて、テクルの場合、特に、動作が行われる場所が発話場所でないということが示される。例えば、

ビリー「オシッコしてくるよ。（バーテンに）お代わりを」

（シナリオ The Protector）

において、テクルがなければ、別の場所で動作をするという意味が表せない。特に動きを具体的にとりあげる場合、それが、話し手と共通の場で生起するかどうかが、大きな問題になるのである。特定の時空において生起する具体的な動作をいう場合、unmarked ならば、自動的に話し手のいる場所で、その動作が行われることになる。特定の時空の具体的動作でない場合は、動きの質的内容的な側面が問題にされることになる。

テイクでも、特に場所を指定しない限り、発話の場所での動作を表す。動作の後の移動の方向が違うだけである。

これは、ディスコース的にも、次のような現象をもたらすもので

ある。例えば、昨日の行動を尋ねる最も自然 unmarked な発話は、

A1…「昨日は何をしたの」

であり、それに対する一般的な答えが、

B2…「昨日は映画を見てきたの」

であろう。ここでのAの「何をしてきたの」という問いは極めて特異 marked である。逆に、Bの「見てきた」は、不自然ではない。「映画を見る」という特定の時空での動作と発話の特に空間的な関係が示されるからである。ちなみに、発話場所がその映画館の中ならば、別場所をしめるテクルなどは、もちろん使用できない。さらに、習慣的動作の場合は、続けて、

＊B3…「最近、ずっと映画を見てきているの」

B3…「最近、ずっと映画を見ているの」

のように、テクルは不自然である。時空の関連づけ（とくに場所）が特定でないからである。さらに、次に見る映画の内容を問う場合、

A4…「今度、一緒に行こうか。どんな映画を見よう」

が一般的なのに対して、

A4…「今度、一緒に行こうか。どんな映画をみてこよう」

では、明らかに移動的な意味が marked である。「どこの映画館で」のような場所が特に取り上げられるという強い文脈が必要である。映画の内容は、具体的な特定の時空と結び付けられていず、質的・内容的問題だけが話題となっているからである。発話場所と動作の場面のとらえ方の相対的関係が、このような形式によって表現されるのである。ここから、逆に言えば、発話の場所は、動作場所からも相対的に関連づけられ、話す手と聞き手が共存するという**発話の場所の一貫性**が保存されていると言えよう。そこで、例えば、待ち合わせの人を探しに行くとき、

ちょっと調べてくる。

という表現が、「もどってくる」というニュアンスを含み、発話の場所を保全するという機能をもたらすことになるのである。

そうすると、場所をかえて動きをするということが典型的に問題になるのは意志的な動作であるということが考えられる。そこから、意志性に関する傾向的な制約ができる。一例に過ぎないが、女子大生での調査（90人中おかしいとした人数を〔　〕で示す。）では、

私は昨日、六甲山で空き缶拾いをしてきた。〔0〕

?私は昨日、六甲山で足を擦りむいてきた。〔10〕

??私は昨日、六甲山で大怪我をしてきた。〔42〕

＊私は昨日、六甲山でそのことに思い当たってきた。〔90〕

と、あとほど座りが悪いが、意志的動作においては、不自然とした人はない。この現象はクル・イクが無意志的な用法をも持ちつつ、本来的に**意志的動作** agentive であることを表す。[6] これは、もちろん、「〜しにいく／くる」などの形式と対応している。

以上述べたように「別の場所で動作をするということを表すことが、第一の重要な契機であるが、さらに、第二には、テクル・テイクによる**部分動作化**の意味が挙げられる。

部分動作化とは、前項動詞の動きを、移動を介しての動きであると認定することによって、主語の動きの一つの部分として位置付けることである。これには、二つの意味がある。ひとつは、次のようなものである。例えば、「ここで酒を飲んで行け」「ここで酒を飲め」の違いは、前者が「酒を飲む」という動きが「〜して、その後、行く」という一連の動きの中に位置付けられていて、「酒を飲む」

動きに対する、一種の defocusing がなされているということである。同様に、前述の「お国の為に死んでこい」に対して「お国の為に死ぬ」となれば、絶対的に「死ななければならない」という強制的なニュアンスが強くなるのではないだろうか。これも、テクル・テイクによって、「死ぬ」ことが一部分的な動きであると認定し、前項動詞「死ぬ」の意味的な重要度をある程度やわらげているということである。

ただし、重要度をやわらげることと、動作を完遂させるということとは違ったことである。とくに、〔動作〕〔変化〕action process 型の動作では、動作を移動と継起的に関連させることから、完遂的なニュアンスが強くなる。例えば「本を探してきた」という場合、優先的 preferred な意味は、その本が見付かったということであろう。この完遂ということと、動作そのものに対する情報的な重さが軽くなることとは、一見、矛盾するかのようであるが、部分動作として移動と関連づける前提として、その動作を完遂するということがあるのであり、矛盾した意味関係ではない。動作の完遂を前提として、それの部分動作としてのとらえ方がなされるのである。

なお、前述の調査では、

私は、昨日六甲山で足を擦りむいてきた。

をおかしい文とした人は90人中10人にすぎないのに、

私は、昨日六甲山で大怪我をしてきた。

をおかしい文とした人は90人中42人であった。これは、どちらも無意志的な文ではあるが、語用論的に小さい出来事を述べる方が、文の安定がよいということを示している。（なお、往々にしてテクル・テイクなどは、「ちょっと」などの副詞と共起する場合が多いということも任意の作文からわかった。）

部分動作ということは、当然時間的にも、一時性的なものである。

??この会社に永久就職していけ／こい。

が、語用論的に不自然なように、前項動作の発生を、動作を一時性的なものとして認定するという意味になっている。

いずれも、具体的な場面を想定しての、継起性と移動性の意味が、この動詞連合前ヘッドの語用論的な表現価値を一時的なものとして、派生的に、設定していると言えるであろう。

以上をまとめると、特に、動作場所の相対的位置付けの問題は、発話の場が談話の中で常に確認されかつ継承されていくという（おそらく、特に日本語において）一般的な現象を示すものである。さらにここから、移動のなかで動作をとらえるという意味も派生するのである。述語の文法的なカテゴリーとしての場所性が、語用論的問題などとも絡みながら、一つのカテゴリーとして成立しているのである。

八　おわりに

以上、本稿では、テクル・テイクを中心に、方向・場所に関するカテゴリーを、形態論的・意味論的・語用論的な観点から検討しようとした。その際、形式の意味・用法の連続性continuumに関心を払うことが必要であった。さらに、他の言語との対照や、習得との関係、さらに歴史的研究などとの関連をみることで、日本語の方向・移動さらに、場所に関する認知の在り方を解明する必要がある。

注

（1）テイル形の解釈の問題も同様。「多くの赤ん坊が生まれている（結果）」「毎日多くの赤ん坊が生まれている（習慣）」など。

（2）「交替」はクル・イクの交替を、「GAP」は、共通部分の逆行的な省略を、「島」は「そう」による部分要素のとりたてを、「ボ介」は、ボイス形式（まともの受け身）の介在を、「歩く」は、テクル・テイクの代わりにテアルクが可能かどうかを、「場NP」は名詞の場所名詞素性の必要性を表す（＊は不可能。0は可能。1は必要）。最も包括的と思われる田窪1984によれば、場所名詞は次の5つのテストによって同定できる。

「＊ノトコロ」とならない、「どこ」で聞ける、移動の goal, source になる、動作場所の「～で」格になる、存在場所の「～に」格になる

もっとも、「海岸で遊んだ」「海岸のところで遊んだ」のように、場所名詞に「ところ」がつく場合もある（この場合、場所をより specific に表示するという機能がある）など、さらなる検討が必要ではある。

（3）ヘッドは、一般には、例えば次のように規定される（Williams1981, 247）。

the head of X has the same properties (distribution, etc) as X.

対象を付帯する移動など、ヲ格も保存される。しかし、「服を着てなく（着たままの意味）」では、イクの方に意味の中心があると言えるので、後ヘッドとする。

（4）「持たれていく」が言えないといっても、「持つ」が働き掛けを表すということはできないであろう。なお、動詞連合においても、テクル・テイクの後にボイス形式（継起的移動の場合は迷惑受け身の意味になる）が来ることは構わないようである。形態的に一つになっているからである。

（5）前項動詞のアスペクト的特徴からみれば、［過程］ないし［維持］が「同時」的意味になるべき動作の期間であろう。

（6）「彼は梅田で財布を落としてきた」のように、無意志動作に共起するテクル・テイクによって、「わざわざ、～するようなことをしてきた」という皮肉の意味がこめられることもあろう。これは、「わざわざ、失敗しに行ったようなものだ」のような（「ようなものだ」があるのが普通だが）、見立てによる、意志性の無関与の現象である。見立ての中では、動作の現実的な発生の仕方は問題ではない。ただ、意志性の条件も相対的なもので、別の場所での動作ということを強く示す場合、「東京で空襲に遭ってきた」のように言うこともできる。この辺りの現象では、語用論的な要請の強さによって、個人的な判断が揺れうる。

参考文献

荒川清秀　1882　「日本語名詞のトコロ（空間）性―中国語との関連で―」『日本語と中国語との対照研究6』日本語と中国語対照研究会

大江三郎　1975　『日英語の比較研究―主観性をめぐって』南雲堂

奥津敬一郎1974　『生成日本文法論』大修館

近藤泰弘　1985　『補助動詞『てゆく』「てくる』の用法」『日本女子大学紀要』三四

成田徹男　1980　「空間的移動を意味する『～てくる・～ていく』」『都大論究』一七　東京都立大

1983　「動詞『て』形の副詞用法―様態動詞を中心に―」『副用語の研究』（渡辺　実編）明治書院

野沢素子　1975　『『～てくる』『～ていく』と中国語の趨向助動詞『～来』『～去』」『日本語と日本語教育』四　慶応国際センター

田窪行則　1984　「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語日本文化』一二　大阪外国語大学留学生別科

張　麟声　2986　『来る』・『行く』と日中両語の表現性」（未公刊）

寺村秀夫　1968　「日本語名詞の下分類」『日本語教育』一二

森田良行　1984　『日本語の意味とシンタクスⅡ』くろしお

1968　「動作・状態を表すいい方」『講座　日本語教育』四　早稲田大学

1977　「日本語の動詞について」『講座　日本語教育』一三　早稲田大学

森山卓郎　1986　「日本語アスペクトの時定項分析」『論集日本語研究（一）』（宮地　裕編）明治書院

1986　「接辞と構文」『日本語学』五-三（明治書院）

1987　『日本語動詞述語文の研究』（明治書院）印刷中

吉川武時　1968　「～ている・ていく」『日本語教育』七五

1971 「現代日本語のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』(金田一春彦編) むぎ書房
Clark.E. 1974 Normal State and Evaluative Viewpoints "Language" 50
Kageyama T. 1982 Word Formation in Japanese "Lingua" 57
1984 Three Types of Word Formation "Neblae" 10
Levinson.S. 1983 "Pragmatics" Cambridge U.P.
Lyons J. 1977 "Semantics 2" Cambridge U.P.
Williams E. 1981 On the Notion of "Lexically Related" and "Head ot a Word" "Linguistic Inquiry" 12-5

〔付記〕
本稿は、『日本語動詞述語文の研究』(明治書院・一九八七年秋刊行予定)の第Ⅲ部第四章場所表現の類型——場所・方向・移動——に一部重複する。併せてお読み下されば幸いである。
なお、岩野靖則氏、矢澤真人氏、益岡隆志氏、岡田袈裟男氏、村木新次郎氏、石神照雄氏、川口義一氏、望月通子氏などから有益なコメントを頂いた。記して感謝する。

—本学助手—